

# 吉岐から20人、総勢230人で盛会 東京雪州会創立95周年記念総会

## 東京雪州会会長 牧山康敏



吉岐市緑化寄付目録を白川市長に渡す牧山会長

を表すると同時に、伝統に安住することなく新しい潮流を見つめていきたい」と挨拶、会員の協力を求めた。さらに今回、東京雪州会の名称を『東京吉岐雪州会』に変更した経緯等も報告。役員人事など総会議事の後、雪州会が18年度から継続している吉岐市緑化寄付(20万円)目録を牧山会長から白川市長に手渡した。

白川市長は挨拶で雪州会の協力を謝意を表すとともに吉岐の近況と市政の取り組みを紹介。また来年3月で期限切れとなる離島振興法が10年延長されたことを歓迎し、離島航路運賃のJR並み料金の実現に向けてさらに努力する決意を述べた。

# 劇団「一支国座」 第2回 島外公演 「時の贈り物」を終えて

堀川 千代子



### 《短歌とエッセイ》 市山 節子 哲学の道(京都)

川沿いの石のベンチに青年が思惟(しい)像のかたちに黙(もだ)して動かず

「人は人われは我なり」を胸裡(むなうち)にきざみつつ歩く哲学の道

琵琶湖よりひきたる疏(そ) 水に鴨たちが艶めく羽根を競い合いおり

店先を陶器のたぬきが並びいて愛きよう振りまく歓迎役に

わが希(ねが)い受けられそうな童顔の幸せ地蔵に護摩木(ごまぎ) 供(く)うる

### 風情がある京都の竹垣

京都の景観をつくる竹林の道や、竹垣のすき間から見える寺や料亭の庭の紅葉等、風情があつて私はとても好きです。

落柿舎へ向かう奥深い竹林の道を歩いた時のさわさわと鳴る竹林の風の音が今も忘れられません。

京都には竹職人の人も多く、老舗の料理店等、竹の櫛の所を互いに段がつくように違わせて竹垣を作ったり、竹のさわやかさを演出したりするそうです。

竹の素材を生かしたアーチ型の竹垣に出会うと、京都ならではの伝統の美しさを感じ心が和みます。

日本古来の竹は、緑色が美しい真竹をよく使い、良い竹は根元を揺らすと、竹の元気がよくわかれるとの事です。

竹は柔らかく優しく、人それぞれの感じ方で眺め、楽しむ事ができ心を癒してくれます。京都の玄關の顔が竹垣で、涼しい趣と、おもてなしの心が息づいていて、職人の竹への想いが美しい風景と共に今も新鮮に甦(よみがえ)ってきます。



### あしべ文芸第215号 俳句作品集より

風鈴の音も照らして月明かり  
千し草の匂い懐かし深呼吸  
森 万里

十六夜や全窓ともし豪華船  
航跡はどこまで続くいわし雲  
柳澤幸子

朝顔の藍をふかめてひと日終ゆ  
夕焼や夜外ステージ二胡の音  
奥野和代

野ぼたんのひと日の色と決めて咲く  
風鈴のチリともならぬ今宵かな  
祐

扇機タイマー仕掛けの一夜かな  
ちから水踏ん張る若手山車担ぐ  
吉永清子

迎え火や雨を供とし来たりけり  
落とし種草の中より南瓜出で  
興津美智子

### あしべ文芸第215号 川柳作品集より

御先祖の乗って来る船舳かも  
盆近く誰を恋しと哭く蟬よ  
高内絹子

新盆の仏となりて一人の死  
幕掃除盆花飾り気も晴れる  
松永扶巳

年一度お盆参りに家族づれ  
孫達も部活 今年は一人盆  
中村二枝

一早く胡瓜の馬で祖霊着く  
迎え火ではるか彼方の浄土より  
三浦ツヤ子

蟬時雨今年も来たよ盆三日  
初盆に家族揃って墓参り  
立石秀子

盆花火散り友の顔思い出し  
祖霊様ゆつくり帰る茄子の馬  
篠崎絹代

迎え火を焚いて万端君を待つ  
初盆を迎え火ともし先相待つ  
横山幸子

初盆の友の姿は夢の中  
初盆の友の姿は夢の中  
高内絹子

盆近し父 母偲び墓掃除  
亡き信友を偲ぶお盆もあ何度  
中村二枝

初盆に友の好物ひとつ添え  
盆近し家族総出の大掃除  
栗島其枝

長男の嫁が出番の田舎盆  
盆写真三十路の亡母はセピア色  
篠崎絹代

先相待つお盆三日の帰省客  
人子や孫に椅子を寄せ合う盆の卓  
竹尾久恵

地 夢でいい逢いたい人のお盆来る  
松永扶巳

天 かずら引き昔ながらの島の盆  
横山幸子

軸 初盆に老いた子供が勢揃い



赤穂浪士の大石内蔵助に扮した大川さん

### 投稿 カラオケ演歌の旅

大川 醒成

自然、大地は秋真っ盛り、朝夕の風に晩秋を感じます。

先般、十月二十七日、諫早市、平安閣諫早サンプリエールホールで、第八回「あなたの花道・秋の唄祭り」と銘打ったカラオケ大会が開かれ、ステージの綴帳が開くと趣味の演歌を歌う出演者、観客との心のつながる交流が、全身に元気が伝わってくるようでした。

以前のステージで披露した、大石内蔵助の衣装にも多少変化を加え、第二弾ではかぶとを自作してかぶり、そうした祭典に向けて、さらに歌、歌心、衣装にも磨きをかけました。自分は、今日一日を振り

返り、日々の生活で疲れた心を少しでも癒すべく、歌心から誘われ、「歌は語るもの」「セリフは歌うもの」と演歌を口ずさみます。ステージでは、曲の艶とメロディーをほんの一瞬でも分ち合いたいと思つて歌っています。

それによつて、気分も若々しく保て、人生を楽しまつた設計の一環として、カラオケ演歌を歌いながら、リズムを感じて「歌の旅を続けています。ひとつまみの幸せでも歌を通して互いに支え合い、少しでも豊かな人生を歌謡の魅力を通して味わい、そして何より健康のために歌による心身の支えが大切だと思つています。

気分ほどよき旅先の車窓から、美しい秋の景色もそんな私を応援しているように、歌が結ぶ人と人の心の親睦のありがたさを感じています。